

平成24年度秋田県産業教育審議会議事録（要旨）

1 日 時 平成24年10月24日（水）13：30～16：00

2 開催場所 秋田県立秋田工業高等学校

3 出席者 13名

高橋 春實 （秋田県立大学生物資源科学部教授）
小川 信明 （秋田大学大学院工学資源学研究科長）
三栗谷俊明 （国際教養大学キャリア開発センター長）
菊地けい子 （菊地合板木工（株）取締役）
有田 正司 （（株）花徳代表取締役）
佐野 元彦 （株式会社サノ・ファーマシー代表取締役社長）
泉 牧子 （秋田市農林部農林総務課6次産業化専門員）
松田 悦子 （株式会社松田専務取締役）
山崎 裕子 （山崎ダイガスト（株）取締役海外事業部長）
岩澤 道隆 （秋田県産業労働部産業政策課長）
斉藤 孝雄 （秋田県中学校長会会長）
新田 宏光 （秋田県高等学校教育研究会工業部会長）
矢田部 晃 （秋田県高等学校教育研究会農業部会長）

4 議事内容

- (1) 開会
- (2) 教育委員会挨拶
- (3) 委員紹介
- (4) 工業科授業参観
- (5) 協議

高等学校における産業教育の改善・充実策について
～地域の活性化に寄与する人材育成の在り方について～

5 協議概要

議 長 秋田大学でもこのテーマと全く同様の悩みをもっている。キャリア教育という意味では、この会での議論を参考にさせていただきたい。秋田大学も平成26年から工学資源学部が国際資源学部と理工学部になる予定であり、地域貢献はキーワードになる。
事務局より、今回のテーマ等についての説明をお願いします。

事務局	事務局説明
議長	<p>大きなテーマは、昨年に引き続き「高等学校における産業教育の改善・充実策について」であり、サブテーマは「専門高校において、地域の活性化に寄与する人材育成をどう進めていくべきか」である。専門高校には、地域の発展に貢献できるどのような資源があり、それをどのように活用することが期待されているのか。また、高校生は地域の活性化に対しどのように寄与できるのかについて、発言をお願いしたい。</p>
A委員	<p>県立大学でも同じような課題をもっている。学生を社会に送り出すときに、地域のことを学生は本当に分かっているのかが課題の一つである。大学の中だけではなく地域に飛び出してみるように話している。学生も入学してからどのようなことをやりたいか明快な回答がない。目的意識が希薄である。高等学校の現状はどうかお尋ねしたい。地域の人がどのような考えでどのように働いているかを見せなければならない。これまであまりこのようなことは実施していなかったが、企業や農家に学生を連れて行き、今何が問題でどのような課題があるのか、自ら体験して聞くことが大切である。高等学校のキャリア教育の進め方について伺いたい。</p>
K委員	<p>生徒にとって入りたい学校と入れる学校は必ずしも一致しない。ただ我々は、入学してきたからには目標を決めさせ、進路実現のために頑張らせている。早期の目標設定が重要である。本校は県外就職が多いが、保護者の希望としては県内を望んでいる。やむを得ず県外に就職している状況もある。</p>
L委員	<p>本校の場合は、大学進学を希望している生徒は目的意識が高い。現在、きのこの研究を進めており、その生徒たちは目的意識をもって取り組んでいる。ただ残念なことに、農業関係の就職先があまりないのが現状である。</p>
議長	<p>大学側から見ると、大学に入学するまではモチベーションが高いが、「入学してしまえば・・・」という感覚が強い学生もかなり多い。高校時代からモチベーションをしっかりとってもらったほうが我々はやりやすい。同じことは、高校卒業後就職される方にとってもそうかもしれない。もっと先を見据えて欲しいという気持ちがある。「自分探しをしよう」と、学生に対しよく話している。将来、自分がどんな人間になるのか見据えて考えようということを早い時期に伝えると、彼等も考えるのではないか。</p>
A委員	<p>L委員の発言のように、しっかりした目的をもって入学してくる学生もかなりいる。恐らく高校入学時は、自分は地域にどう貢献するか、どのような役割を果たすかについて考えられる時期ではないと思う。一方で大学入学時は、受験勉強で手一杯の状態であるのがほとんどで、入学後は安心</p>

してしまい、目的がはっきり見えなくなってしまう。

大学でも、学生をいろいろなところに連れて行っているが、高等学校ではどのような取組をしているか。

K委員 先ほどの話のように、教職員が地域の中に入っていくことはとても大事だと思う。先生方自身が地域の活動をやらずに生徒に指導することは無理であり、教える側が地域に入って、どんな仕組みや楽しみがあるかを経験して、それを教えることが大事だと私は思う。本校職員には、もっと関わりを持って欲しいと話している。

E委員 今の点については、昨年の提案の中で「学校間ネットワーク」に書いてある。これは同じ専門高校同士の他学科とのネットワークであるが、キャリア形成や地域に対する意識をもつということは、縦のネットワークであり、小・中・高・大のネットワークが必要だと思う。現在、秋田県の小学生はふるさと学習をやっており、「総合的な学習の時間」で近隣の商店街を訪ねてみたり、周辺の地図を書いてみたりしている。中学校ではグループを組んで、例えば地域のごみ処理のことをもっと詳しく調べてみよう、というようにいろいろなテーマをもって活動している。高校ではインターンシップで自分の職業について考えるようになる。小・中の土台を生かし、縦のネットワークや連携をきちんと整合させ、積み重ねていくことが重要でないかと思う。そういう意味では、小学校ではぼんやりしたものであり、中学生では少しずつ固まっていき、高校生ではある程度固まっていき、大学生になって固まって社会に出る、あるいは、高校で固まって自分の目指すべき仕事に就く。ぼんやりしたものを徐々に明確にしてあげるという縦の連携が非常に重要ではないか。

事務局 今、E委員からの御指摘の課題が教育委員会でも今日的な重要な課題だと捉えている。いわゆる小・中・高を貫くキャリア教育を確立し、体系的なものを作っていこうとしており、今年度から本格的に取り組み始めている。今までは御指摘のとおり進路学習や進路指導として、小学校は小学校、中学校は中学校、高校は高校という形で、継続性や接続ということではあまりできないままそれぞれの校種独自でやってきたという部分があった。そのような問題意識から、「キャリア教育推進フォーラム」を小・中・高合同で取り組むところである。昨年度から第六次秋田県高等学校総合整備計画において、キャリア教育は重点的な課題として位置付け取り組んでいる。

E委員 例えば、中学校の先生が工業化学科という学科はどんなことを勉強して、その先どのような仕事により社会に貢献できるかということについて知らないのではないか。土木や建築はイメージできるが、今、お話があった接続についてお互いが良く知るというところは非常に重要だと思う。

- J 委員 中学校の立場から現状を話したい。小中学校においては、キャリアノートが教育委員会から配付されて、小学校で記入したノートを中学校に持って行くという動きがある。小学校でどんなことをやってその子が何を考えたか、将来何になりたいかについて、小学生なりの夢を中学生としての指導に生かそうとしている。小中学校は学校そのものが地域と関連しているの、商店街を見学することについては小学校の延長線上にある。地域によっては小学校を含めた中高連携の動きもあるようだが、実際にキャリア教育に関して突っ込んだ話し合いには至っていないのではないかと。中学校としても必要性を感じている。
- 事務局 キャリアノートについては、小中学校で記録したものを高校にもそのまま引き継いでいきたいという構想をもっている。一人一人がどのような就業体験をしたとかあるいはボランティアや地域の活動に参加したかということ踏まえて、高校なりの個に応じたキャリア教育を考えていく必要があるという意識である。
- K 委員 実は中学校の先生方は、自分の学校の卒業生の高校卒業後の進路について把握していないと思う。前任校では、進路先の5年くらいのデータをもって中学校を回った。そこで初めて進路先がわかる。そのような活動も必要だと思う。
- B 委員 私は23年間都内の私立の中高の教員をやっていた。その中で、「100人先生」という活動をやっていた。いろいろな業界の方を招いて子どもたちに仕事の種類を知らせるという取組である。教員は経済のことについては素人なので、教員が作ったプログラムの中で子どもを育てようというのは無理が生じる。先生主導で何かをやろうとしてもどうしても限界があり、また偏見もある。例えば夙職人のような職人を招き、こういう世界もあるんだと社会との交流の場を作ることができた。そういうことを、秋田ではしてくれていなかったと思う。だから職業についてよく知らなかった。初めて東京に行って、世の中にはこんなに仕事の種類があるんだと思った。そのような出会いの場を小学校、中学校、高校と作っていくことが大切だと思う。
- 本学には、何をやりたいか分からないから来たという学生が結構いる。これは広く国際教養ということだからである。秋田工業高校から本学に来た学生が今年卒業した。彼は企業からひっぱりだこであった。なぜかという、工場のラインに立つ工員の気持ちが分かった上で、マネジメントができる管理職になっていくという将来像を描くことができる人物だと考えられたからである。語学ができ、かつ現場のことも分かる人材というのはあまりいない。大人がこのラインだとこういう将来がある、というようにしてしまうと進路を狭める危険性がある。もっと失敗を恐れずに何かにチャレンジすることを

奨励してあげる必要がある。

地域の活性化に寄与する人材についてだが、本学の1期生で地域に貢献している人物がいる。彼も大学1年のときには秋田に戻って何かをしようとは思っていなかった。何かのきっかけで若者はどんどん成長するので、パッケージの中に収めようというのは、私は逆にリスクがあるように感じる。それよりもいろいろな世界の人や異なる年代の人と接する機会を持つことの方が大事だと思う。本学でも地域貢献の一環として保育園や町内会の方たちに学校に来ていただいていろいろな交流をしている。将来それがどういう形で大学に還元されるかという絵は全く描いていない。できることをとにかく数多くこなしていくというスタンスでいいと思う。あまりにも成功だけが求められてしまっているが、失敗の中にも学ぶべきことがあると思う。

先ほどの授業参観で、工業化学科の生徒に「秋田に残りたいか」と聞いたら、「都会に行ってみたい」と言っていた。そうだなと私も思った。機械科で旋盤をやっていた生徒は「これを生かして残りたいです」と模範生の答えだったのでみんなそうかなと思ったら、そうでなかった。何が正解と思わなくてもいいと思う。そのような場を中高でどのくらい秋田県で設置をされているのかをお聞きしたい。

議長

仕事の種類をたくさん知らせるということは重要だと思う。そういう機会を多く作ることができればと思う。地域貢献の一つの考え方だと思う。

H委員

地域の活性化に寄与するというテーマがあるが、就職もしくは秋田に愛着をもっているかの2つが大元だと思う。小学生から就職を考えて、中学校、高校と一生懸命考えて、大学でも考えている人は本当に一握りだと思う。やりたいことをいろいろ探しながらやりたい仕事を見つけて、自分の学力と能力を考えながら最終的に就職先を決めると思うが、秋田に対して何か貢献したいとか残りたいと思えるかというのは、愛着をどれだけもってくれるかということではないかと思う。私は横浜に生まれて秋田に引っ越してきた人間で、秋田に愛着をもって秋田に住むことを選んだ人間である。あまり狭く秋田への就職を考えて教育を行うと、逆に外への憧れが非常に強くなる。そういう意味では一回外に出てもいいと思う。実際にはいずれ秋田に戻ってくる、もしくは外から秋田に貢献できるようになるということを含めてトータル的に秋田を活性化しようとするのではないか。ふるさと創生という大きなテーマがあるので、それにつなげられるような仕掛けを県と高校が作ることで、地域に対して喜んでもらえるような成功体験として、就職とうまく結び付けていければいいと思う。

事務局

さきほどのB委員からの質問に回答したい。「総合的な学習の時間」ができて10年くらいになる。中学校でもその時間を使って、グループごとに関心のある会社への職場訪問や就業体験を以前に比べると格段にやるようにな

ったと思う。高校では「総合的な学習の時間」等を使いインターンシップやボランティアを2年生までにとちらかやるようにしている。ところが、県内の企業について意外と高校生が知らない。県内には、日本や世界に誇れるような企業がある。昨年度から教育委員会の事業として、県内の企業を紹介するプレゼンを作った。すべての県立高校で1コマの授業を使い、キャリアアドバイザーが説明している。今年度は企業紹介だけでなく、働く意味や若い先輩からのメッセージを入れたり、進学校では企業紹介だけでは物足りないということで、それに応じたものを作ったりして取り組み始めている。秋田県では職種を紹介する場合に、身近にある職種とない職種があり、まだまだ工夫する余地があると思う。ふるさと教育は小中学校でもやっており、高校ではこのようにふるさと企業紹介事業という形で取り組んでいる。

E委員 地域との接点、職業との接点を考えた場合に、在学生の親や同窓会を引っ張り込むということが必要だと思う。なかなか秋田では触れることができない職業に就いている人が同窓生にはいる。作家やお笑いタレント、秋田中央高校出身のノーベル賞候補という方もいらっしゃる。同窓会、同窓生を活用し、後輩たちに自分の体験を話して欲しいとお願いすれば喜んで駆けつけてくれる方がたくさんいらっしゃると思う。

議長 卒業生が講義や授業をするというようなNHKの番組があるが、そのようなものが秋田県でもあってもいいと思う。

B委員 福井大学では、パスワードをかけて外部から見られないようにし、在学生しか見ることができないホームページがある。その中で、卒業生からのメッセージを動画でまとめている。パスワードをもっている在学生だけは卒業生のメッセージを動画で見ることができる。

議長 福井県は県民が日本一幸せ感を感じている県である。そういう点では福井を参考にすべきなのかもしれない。

H委員 産業教育に関して言えば、弊社のような工業系の会社では工業の学生が技術をもって就職すると即戦力として重宝される。その後の仕事なんらかの形で生き、成功体験をもつことで会社に愛着をもってくれる。自分の習得した技術の愛着と地域の愛着が結び付くと会社への愛着になり、離職率の低下につながると思う。技術力向上のための教育が地元への就職の定着につながると思う。

C委員 先日、高校生の研究発表があり、どの発表もどの生徒も地域貢献をしたいという話をしていて。感動するとともに頼もしく思った。
先ほどの話題の、先生方が学校の外へ出て地域のネットワークに入ってい

くというのは賛成である。子どもたちの活動が役立つようなネットワークをまず作り、地域の人とコミュニケーションを図る中で初めて学ぶことが多いと思う。

高校では、目的意識を持った人とそうでない人がいるという話だが、なかなか自分の将来の夢をはっきりもっている人というのは少ないと思う。持っている人はそのままいいし、もっていない人は周りが励まして手助けをする。考えているうちに、自分が本当にしたい方向に軌道修正していく。それが高校だと思う。すなわち、高校くらいまでは全部訓練だと思う。思い通りにいかないこともあることを知ることは、子どもたちにとって大事なことである。

「今の秋田には君たちが必要なんだ」というメッセージを常に発信できるような状態にしておくことが、いい人材を秋田に呼び戻すためには必要に思う。

私は、田舎の小さな木材の会社を経営しているが、何が不安かということ、ものを知らないということである。外の空気を吸わせたい。東京に出して、世界に出して、自分たちの立ち位置をしっかりと把握して欲しい。そうすればいくらでも活躍の場はあると思う。“つなぎ止める”というのは決して秋田県のためにならないと思う。秋田県の現状が、日本の現状がどのような状況にあるのか、それらを知って帰って来て欲しい。そうでなければ衰退してしまう。ぜひ高校までは大らかな気持ちで、訓練所だと思っていただきたい。

最終的に我々は、次世代を担う人材を育て世に送り出す必要がある。子どもにも「地域社会に出なさい」と言うのは、子どもが自分を知ることと同じである。自分がしたことを喜んでいただけることで、初めて自分の価値を見出すことになる。そこで感じる達成感により、自分も持っている能力に気づき、いろんなことを考えるようになる。そのような考える力を養うことが、教育の大切な役目である。そして、子どもたちが外へ出て秋田に戻り、活躍できる場を用意しておくことが我々大人の大事な使命だと思う。

D委員

学校というのは、社会のことを子どもたちに教えて卒業させるところではないのだと思う。そもそも学校で社会のことなんか教えられない。社会のことは社会で学ぶ。学校で教えることは違うのではないかと思う。

先ほど話題に出た、先輩、OB、同窓会などは、ものすごく力をもっており、なおかつそれらは地域そのものである。地域の資源とは、モノと（特に）人である。友達が私にとっては資源であり、それが地域である。要するに人間関係のつながりである。同級生や先輩、後輩など、それらは貴重なネットワークであり、何とか利用できないものか。

議長

私も大学にいるが、仕事は人だと思っている。人間関係ができないと、なかなか仕事もできない。人間関係づくりができるような環境を作ってやることも必要なのかもしれない。会社に入ったときにはそれが極めて重要である。

必ず、同窓生がいることをわからせたほうがいい。

F 委員

産業教育は、間違いなく地域に貢献している。先日、私も高校生の体験発表、研究発表を聞く機会があった。どの高校も、専門性を取り入れながらきちんと地域貢献をされている。先生方や地域の方々が、日々の活動の中できちんと人材を育てている。その生徒たちが、地域貢献をするためにこのような勉強をしているという自覚があるかはわからないが、それは私たちがすべきことである。私たちがそのようなチャンスをきちんと与えてやるべきであり、大人である私たちが伝える必要があると思った。

この度、高校生の農商工連携を提案したところ快く受けていただいた。金足農業高校、秋田商業高校、秋田工業高校の3校から10人ずつの参加で、「17歳の6次産業化プロジェクト」を立ち上げて、彼等に商品開発をしてもらった。「あなた達のおかげで6次産業の手掛かりができた」と伝えてあげたいと思っている。

余談だが、このメンバーは女子が25人で、男子がたったの5人（秋田工業高校）である。この5人が一生懸命アイデアを考えていろいろと提案するが、全部却下されてしまう。でも、黙々と作業してくれる。最後まで後片付けをしてくれるのもその5名である。女子のパワー、発想力もすごいが、影で支える男子たちを見てあげて、貢献してくれていることを皆さんに伝えたい。6次産業というのはかつてはなかった産業である。それを作り上げるのは私たちのような固い頭ではなく、産業教育という専門的な勉強してきた若い人たちである。

具体的には、秋田工業高校はイメージキャラクターを作ってくれた。秋田の米粒がトマトやカボチャなどの被り物でいろいろな加工品に変身する。米には無限の可能性があるというのを表現してくれた。金足農業高校は、秋田の農産物が持つ力を発見してくれた。秋田商業高校は、高校生にマーケティングを取り入れたり、全校生徒にアンケートをとったりした。それらを経てこぎつけたのが、今回の商品である。

一度（秋田を）離れても、秋田に再び戻ってくるができるような新しい産業、新しい農業の形を築くのが我々の仕事ではないかと思う。

議 長

同じこと（女子の力）は大学でも感じる。研究室で中心になっていくのは女子、ついていくのは男子である。男子もやらせればきちんとできる。でも、どうしても後ろに居たがる傾向がある。

G 委員

「地域づくりコーディネーター」という役職でいろいろなイベントに地域の子ども達を巻き込み活動している。最近高校生が活躍したイベントを2つ御紹介する。

ひとつは、9月下旬に湯沢市で開催された「全国まるごとうどんエキスポ」である。湯沢雄勝郡内4校、約200名の高校生にボランティアとして、ご

みの処理を担当してもらった。県内外から多くのお客様においでいただいたが、何よりも評価が高かったのは高校生の機敏で配慮ある対応であった。食べ物のイベントにも関わらずゴミひとつ落ちておらず、高校生の力がイベントの高い評価につながった。

二つ目は、仙台市で開催した「ハイスクールサミット」である。報告の被災地の高校生を中心として、これから新しい東北をどうやってつくっていくかについて高校生の目線で考えるものである。1月は東北6県の高校生が集まり意見を集約し、その時の提案により8月には全国の高校生が集い意見を交えた。秋田県からも3校が参加し、被災地の高校生と交流することで被災地を自分のことのように考える事ができたと伺っている。

ふたつのイベントから共通して感じた事がある。高校生が感じた「人に喜んでもらえる事を誇りに感じる」という思いが、「職業意識」に繋がっている気がする。また各地の同年代と交流することで、今後の自分の生き方を考える刺激にもなったようだ。

私が高校生をコーディネートする上で大事にしているのは「恥をかいてほしい」ということだ。失敗から学ぶことは多く、成長の一助となる。そのような機会をつくるのは大人の役割と考える。

このような企画に参加してもらおう上で、専門高校としての特徴（強み）は

- 1 先生方の理解がある（経験が大事であることを理解してくださっている）
- 2 生徒のフットワークが軽い
- 3 経験したことを次に繋げる事ができる

高校生により多くの機会を提供し、実にしてもらうためには、学校・地域・企業がお互いの間口を広げ、アンテナを高く張り、情報交換していく必要が今後一層求められる。

議長 トップレベルの社会貢献だと感じた。

G委員 一握りの高校生しか体験できていないので、これからどうやって広めていくかが課題の一つである。

I委員 先ほど、事務局からの説明にもあったが、若干補足する。

県としては県内就職が喜ばしい、という視点ではなく、我々はあくまでも希望する生徒が希望するように進むべきだと考えている。県内の専門高校の生徒たちは、授業や様々な活動を通して、比較的目的意識がよく形成されている。また、授業形態も少人数で、コミュニケーションが図られており、それが強みであると思う。

事業主の方が最も困るのが、高校生、大学生を問わず、大人と話ができないことである。特に高校生は、就職の面接会で声を掛けても話してくれない。

サブテーマの「地域の活性化に寄与する人材育成の在り方」についてだが、専門高校は現在でも十分に寄与していると思う。あまり追求しすぎると、産

業構造の変化や科学技術の進歩についていけない部分が学校現場にはあるのではないか。施設設備の充実を図るにしても、数十億かかってしまう。専門高校はこれまで培ってきた普遍的な教育をしていることが強みなのではないか。あとはいかに専門高校を知ってもらってファンを増やすか。

経済同友会というものがある。お願いをすると、いくらでも出前講座をやってくれる。そういった民間の力を借りることも、高校生のためだけでなくもちろん先生のためにもなるのではないか。

議 長

覇気がなく頼りない学生が多くなり、大学の教員も困っていることが多い。就職難に関する直接的な問いかけをしても反応が鈍い。一方、ハイスクールサミットに出てくるような高校生は、まったく問題ない。モチベーションがほとんどない学生が全国にかなり広がっている。これは高校、大学を問わずに日本の課題でもある。

出前講義の話だが、我々大学ももっとやっつけていこうとしている。企業の方に講義に来てもらうことを、もっと積極的にやろうとしている。高校でも同じことは必要であろう。特に企業にいる先輩のお話なら割と聞きやすいかもしれない。

実践的な教育や外部人材の活用という意味では、そこ（民間の活用）を中心にしていけばどうかと思う。ただし遠方から来ていただくのは、お金もかかり難しい。それでも、地元出身の方で、夏休みの帰省時を利用して集中講義のような形でやってもらうとかすれば、できないことはないと思う。中央や世界で活躍されている人もいるので、秋田に来る機会があったら、その時に高校や大学で講義してもらうのもいいかと思う。

大学から高校への出前講義も、秋田大学でも結構やっている。秋田大学では、受験の観点から高校の先生にきてもらい、高大接続の教科書（英語、数学、物理、化学）を作ってもらっている。高校の先生方に話を聞きながら作ると、全然異なった視点で教科書ができる。この話は教科書の話であるが、キャリア教育に関してもやはり“双方向”でやったほうがいいような気がする。双方向の行き来をもう少し活発にできれば、お互いにどんなことをやっているのかわかってくると思う。

以上で審議を終える。